

未知の国からの発信

甦れ！縄文の心と恵を紡ぐ道

第一回 未知の国みちのくの縄文街道なつとみち首長サミット

平成十七年十一月十五日(火)午後一時~五時(十二時開場)
会場:八幡平ロイヤルホテル2Fロイヤルホール(入場無料)

主催: NPO法人 風景の生命を守る地域づくりネットワーク

未知の国 縄文街道 Iwate-Akita-Aomori

第一部 三県の文化人による鼎談

「未知の国からの発信 甦れ！北東北の環境遺産」

岩手・高橋克彦氏 (作家)

秋田・富樫泰時氏 (元秋田県立博物館館長)

青森・藤山直迪氏 (NPO法人「縄文街道」代表)

第二部 ホーミング

「縄文街道」沿線市町村首長による松田隆行氏による鼎談

平成18年3月

NPO法人風景の生命を守る地域づくりネットワーク

後援:

岩手県、秋田県、青森県、北東北広域連携推進協議会、八幡平市、浄法寺町、岩手町、鹿角市、小坂町、大館市、青森市、八幡平市、秋田県観光連盟、(社)青森県観光連盟、西根町観光協会、(社)松尾八幡平観光協会、安代町観光協会、(社)東奥日報社、デーリー東北新聞社、陸奥新報社、NHK盛岡放送局、IBC岩手放送局、青森朝日放送、NPO法人いわてNPOフォーラム21、NPO法人



未知の国からの発信

よみがえ

こころ

甦れ！縄文の心と

主催者挨拶

NPO法人 風景の生命を守る地域づくりネットワーク

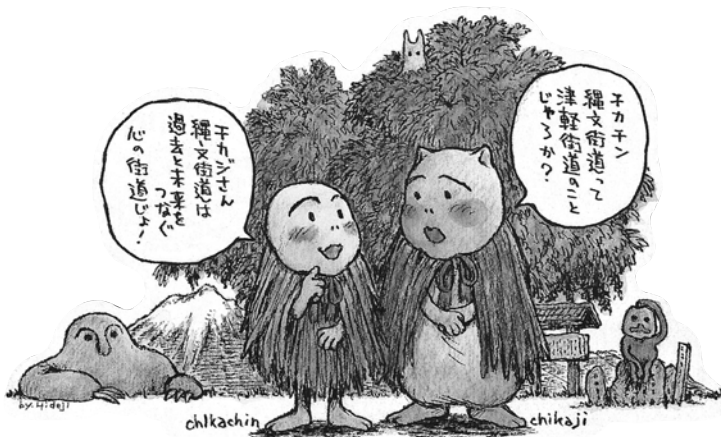
代表理事 田村 麗丘



本日はお忙しい中、第1回未知の国縄文街道首長サミットにお出でいただきまして誠にありがとうございました。いま全国各地で地域の生き残りをかけたさまざまな取り組みが行われております。当法人におきましても平成13年の発足より、北東北を活性化させるべく、生命（いのち）の哲学にもとづいた独自の地域活動を行なってまいりました。その基幹事業の一つとして八幡平地域を起点に青森市までの北東北の中心域を貫く国道282号及び7号、約160キロメートルを「未知の国（みちのく）縄文街道」と名付け、鹿角地域、津軽地域を結ぶ広域連携事業を北東北広域連携推進協議会ご支援のもと実施してまいりました。

今般その集大成事業として、北東北三県、沿線市町村、教育機関、民間事業者、NPO等の諸団体、そして文化を担うさまざまな方々のご支援により、縄文街道沿いに連なる豊かな生命の環境遺産の永続的保護育成と一体的観光による全国発信を行うため、県域と官民の枠組みを取り払った広域連携事業の立ち上げを行います。

その第一歩として、この縄文街道入り口に誕生した八幡平市発足を記念し、「未知の国（みちのく）からの発信 甦（よみがえ）れ！縄文の心と恵を結ぶ道」をテーマに、環境視点の地域づくりと新たな観光振興を考える、沿線市町村首長による初の広域連携サミットの開催を企画いたしました。また、NPO法人劇団ゆう様のご協力を得て、地元の小学校児童も風景を謳ったイメージソングづくりに参加し、最後にご披露をいたします。長丁場ですが最後までお付き合いいただきますようよろしくお願い申し上げます。



めぐみ 恵を結ぶ道



祝 辞

八幡平市長 田村 正彦氏

みなさんこんにちは、ご紹介いただきました地元八幡平市の市長を務めさせていただいております田村でございます。素晴らしいこの会の開会にあたりまして地元として一言ごあいさつを申し上げたいと思います。

本日NPO法人風景の生命を守る地域づくりネットワーク主催の「未知の国（みちのく）からの発信、甦れ！縄文の心と恵みを結ぶ道」をテーマに第1回未知の国縄文街道首長サミットが盛大に開催されますこと、心からお慶び申し上げます。

八幡平市は9月1日に旧西根町、松尾村、安代町の三町村が合併し、新生八幡平市として誕生いたしました。私も市長になってまだ、1月半ということで全くの新米市長でございます。合併を記念してこの企画を立てていただき、また遠路はるばる街道沿線の市町村、教育関係者、民間団体など関係者多数のみなさまのご出席をいただいて本市を会場にサミットが開催されますこと、地元を代表して心から歓迎を申し上げます。

みなさまご承知のとおり本県の増田知事も北東北三県の連携を強く打ち出しておりますし、その中心となるのがこの地域ではないか、また鹿角にかけての青森秋田岩手を結ぶ線が知事の言う三県連携のまさに起点ではないかと常々考えております。八幡平市から青森市までの国道282号線と国道7号線約160キロメートルは、十和田八幡平国立公園、そして世界遺産の白神山地や岩手山、岩木山の豊かな大自然が連なっています。またこの間には縄文遺跡が集積されており、三内丸山遺跡をはじめ亀ヶ岡遺跡、環状列石を代表する大湯環状列石、ここの近くには長者屋敷遺跡、そして湯舟沢環状列石など有名な縄文遺跡が数多く散在いたしております。

ネットワークでは北東北の連携と広域観光のあり方を探るためこれまでも岩手県、秋田県、青森県でのキャンペーンやキャラバンの実施、イメージキャラクターの制作など新たな地域イメージの創出と活動を通じて縄文発信を行ってきたと聞いております。本日のサミットが「縄文の心と恵を結ぶ道」をテーマに打ち出しており、地域の連携とネットワークづくりが大きな目的と思っております。また、三県の文化人による鼎談、パネラーに学識経験豊かな先生方のご出席をいただき、いろんな角度から文化遺産についてのご提言をいただいて参考にしてまいりたいと考えております。

本日ご参集のみなさまには大いに連携の輪を広げていただき、我々の貴重な文化遺産を次世代に継承していくこともまた大事な役割でございます。子供たちとともにまちづくりに活かしながら力を尽くしていきたいと考えております。

終わりに、本日の事業を計画されましたNPO法人風景の生命を守る地域づくりネットワーク並びに事業補助をいただきました岩手県をはじめ、関係者の皆様に感謝を申し上げ、本日よりご列席いただきました皆様方のますますのご健勝を心から祈念申し上げましてお祝いの言葉といたしたいと思います。おめでとうございます。

北東北三県の知事からのメッセージ

青森県知事 三村 申吾氏

第1回「未知の国縄文街道首長サミット」が開催されますことを心からお祝い申し上げます。21世紀は「環境の世紀」と言われていますが、北東北三県には、十和田八幡平国立公園や世界自然遺産白神山地をはじめとする豊かな自然が多数残されており、これらを共有の財産として守り、次世代に引き継いでいくことが強く求められています。

また交通、通信手段の発達に伴い、生活圏や経済圏が拡大している今日、県境を越えた交流・連携活動はますます重要なものとなっています。

このような中、環境視点の地域づくりと新たな観光振興を考える広域連携サミットが開催されますことは誠に意義深く、このサミットをきっかけとして、北東北三県の地域間交流・連携の輪がますます広がっていくことを期待しております。

「風景の生命を守る地域づくりネットワーク」をはじめ、関係の皆様方の御尽力に、深く敬意を表し、私からのメッセージといたします。

秋田県知事 寺田 典城氏

本日、第1回未知の国縄文街道首長サミットが開催されますことを、心からお慶び申し上げます。また、9月1日、新たに八幡平市が誕生されましたことを、心からお祝い申し上げます。

さて、北東北三県には広く縄文時代の遺跡が分布しています。本県でも、鹿角市の大湯環状列石、大館市の伊勢堂岱（いせどうたい）遺跡など、県北部を中心に数々の遺跡が存在し、隣県の青森県や岩手県地域と古くから交流が行われていたとされています。また交流の範囲は海を越えて北海道にまで及んでいたと言われており、当時の人々の交流の広さを物語っていると言えます。

このような自然や歴史、文化など共通する地域特性を活かして、北東北三県では、広域連携の一層の推進を図っております。

本県でも、県境を越えた広域連携の推進を重要施策のひとつとして、様々な取り組みを行っております。平成9年度から開催している北海道・北東北知事サミットの合意事項を中心とした取り組みや、「北東北広域連携構想」を踏まえたNPOや企業・行政など多様な主体での連携推進など、北東北三県の広域連携のほか、県境を接する山形県など東北全体との交流・連携、さらには諸外国を含めた環日本海地域との経済的、学術的交流の促進などの取り組みを通じて、魅力と活力ある自立した地域として発展していくことを目指しています。

高速交通の発展、通信情報手段の飛躍的発展により、既に人々の生活や経済活動は県境を越えており、これまで以上に、住民やNPOなど民間団体の県境を越えた交流・連携により、地域や圏域全体の活性化が図られることを期待しております。

終わりに、第1回未知の国縄文街道首長サミットにより、縄文街道沿線自治体の皆様の連携が一層深まりますことを御期待申し上げます。

岩手県知事 増田 寛也氏

第1回未知の国縄文街道首長サミットが、北東北三県にまたがる十和田八幡平国立公園に抱かれた、ここ八幡平市で開催されますことを、心からお祝い申し上げます。

また、主催された特定非営利活動法人風景の生命を守る地域づくりネットワークの田村代表理事をはじめ、関係の皆様におかれましては、日頃から環境に視点を置いた地域づくり、北東北の縄文遺跡や自然景観を生かした広域観光など、北東北連携による地域活性化に貢献されており、深く敬意を表する次第であります。

近年、地方を取り巻く環境は、地方分権をめぐる様々な動きや経済のグローバル化の進展など、大きく変革しております。

このような中、北東北三県では北東北を一体的な地域としてとらえ、各々の地域資源を活かしながら、NPO、地域住民、行政等が交流・連携を図り、より一層魅力と活力のある自立した地域として発展することを目指し、この9月「北東北グランドデザイン」を策定するなど、広域連携による取り組みを積極的に進めております。

本日、北東北三県の文化人による鼎談、縄文街道沿線5市町の首長による広域連携サミットが開催されますことは、三県相互の連携、絆が一層強められ、北東北がますます魅力的な地域として発展することにつながるものと、大いに期待を寄せるところであります。

終わりに、記念すべき第1回未知の国縄文街道首長サミットが、実り多いものとなりますとともに、ご参会の皆様方のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。



概要

- 日時：平成17年11月15日（火）午後1時～5時（12時開場）
- 場所：八幡平ロイヤルホテル2Fロイヤルホール（入場無料）
- 主催：NPO法人 風景の生命を守る地域づくりネットワーク
- 後援：岩手県、秋田県、青森県、北東北広域連携推進協議会、八幡平市、浄法寺町、岩手町、鹿角市、小坂町、大館市、青森市、八幡平市教育委員会、鹿角市教育委員会、青森市教育委員会、(財)岩手県観光協会、(社)秋田県観光連盟、(社)青森県観光連盟、西根町観光協会、(社)松尾八幡平観光協会、安代町観光協会、(社)十和田八幡平観光物産協会、(社)岩手経済同友会、(社)秋田経済同友会、青森経済同友会、西根町商工会、松尾村商工会、安代町商工会、岩手町商工会、岩手日報社、盛岡タイムス社、読売新聞東京本社盛岡支局、毎日新聞盛岡支局、朝日新聞盛岡総局、河北新報社盛岡総局、秋田魁新報社、北鹿新聞社、東奥日報社、デーリー東北新聞社、陸奥新報社、NHK盛岡放送局、IBC岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、ABS秋田放送、AKT秋田テレビ、AAB秋田朝日放送、青森放送、青森テレビ、青森朝日放送、NPO法人いわてNPOフォーラム21、NPO法人関善にぎわい屋敷
- 協賛：岩手県観光誘致協議会、社団法人松尾八幡平観光協会、東北電力、JA全農岩手、JA新いわて、岩手県生活協同組合連合会、小岩井農牧株式会社小岩井農場、岩手県北自動車株式会社、ホテルメトロポリタン盛岡、八幡平ロイヤルホテル、ホテル安比グランド、(株)西根温泉グランド、南部富士カントリークラブ、わしの尾、東山堂、杜陵高速印刷株式会社、第一商事株式会社
- 協力：JR東日本盛岡支社、IGRいわて銀河鉄道株式会社

式次第

開場（12：00）

開会（13：00）

挨拶／主催者挨拶 田村麗丘（NPO法人風景の生命を守る地域づくりネットワーク代表理事）
来賓挨拶 田村正彦八幡平市長

知事メッセージ披露／寺田典城秋田県知事、三村申吾青森県知事、増田寛也岩手県知事

●第1部 話題提供：三県の文化人による鼎談（13：20～14：50）

テーマ「未知の国からの発信、甦れ！北東北の環境遺産」

高橋克彦氏（作家）

富樫泰時氏（元秋田県立博物館長）

藤川直迪氏（NPO法人三内丸山縄文発信の会理事長）

コーディネーター：小原守夫氏（岩手日報社編集委員室室長）

《休憩（14：50～15：00）》

・「縄文街道」紹介VTR放映（秋田放送制作、約5分）

●第2部 沿線市町首長による広域連携サミット（15：00～16：40）

テーマ「未知の国からの発信、新たな時代の観光と連携」

・オープニング／津軽三味線の弾き語り 松田隆行

・縄文街道沿線市町村首長による広域連携サミット

児玉一鹿角市長、川口博小坂町長、二川原和男大鰐町長、清川明彬浄法寺町長、田村正彦八幡平市長

コーディネーター：田村麗丘（NPO法人風景の生命を守る地域づくりネットワーク代表理事）

●第3部 イメージキャラクターとイメージソングの披露（16：40～17：00）

テーマ「未知の国の“いのち”を謳う」

・キャラクター紹介：漫画家 小田ひで次

・イメージソング披露：八幡平市立松野小学校5年生児童とNPO法人劇団ゆう

閉会（17：00）



第1部 三県の文化人による鼎談

テーマ「^{みちのく}未知の国からの発信 甦れ！ 北東北の環境遺産」

パネラープロフィール



高橋 克彦氏 たかはし・かつひこ

1947年岩手県盛岡市生まれ、早稲田大学商学部卒。盛岡市在住。’83年「写楽殺人事件」で江戸川乱歩賞を受賞しデビュー。その後、「総門谷」で吉川英治文学新人賞、「北斎殺人事件」で日本推理作家協会賞、「緋い記憶」で直木賞、「火怨」で吉川英治文学賞をそれぞれ受賞。他に「竜の枢」「眠らない少女」「闇から来た少女」「新聞錦絵の世界」「幻少女」など著作多数。NHK大河ドラマ「炎立つ」原作。平成14年NHK放送文化賞、岩手日報文化賞を受賞。日本推理作家協会等所属。



富樫 泰時氏 とがし・やすとき

1940年秋田県大仙市（旧仙北町）生まれ、国学院大学文学部卒。秋田県払田柵跡調査事務所長、秋田県埋蔵文化財センター所長、秋田県教育庁参事兼文化課長、秋田県立図書館長、秋田県立博物館長を歴任。主な著作「日本の古代遺跡・秋田」「おもしろ秋田むかし考」「歴史を貫く円筒土器文化圏の伝統」「三内丸山遺跡にみる東北文化の源流」「シンポジウム日本の考古学2、縄文時代の考古学」「雄物川と羽州街道」（共著）「秋田県の歴史」（共著）等。



藤川 直迪氏 ふじかわ・なおみち

1929年青森県つがる市（旧木造町）生まれ、東京大学文学部卒。青森県立高校教員、教育委員会を経て県庁企画部長、出納長等を歴任。その後県信用保証協会会長、青森公立大学調整役。現在NPO法人三内丸山縄文発信の会理事長、青森美術音楽鑑賞会会長、青森県ユネスコ協会副会長。青森ペンクラブ等所属。主な著作「縄文の風に吹かれて」。

コーディネータープロフィール



小原 守夫氏 おばら・もりお

1947年岩手県大槌町出身。昭和44年に岩手日報社へ入社し、運動部長、学芸部長などを経て、平成16年4月から編集委員室長。現在、日曜日付け朝刊の「明日に向かって」を連載中。



一 八幡平市を拠点に活動しているNPO法人風景の生命を守る地域づくりネットワークは、国道282号の旧西根町から鹿角市などを経て、国道7号の青森市までの約160キロを「未知の国（みちのく）縄文街道」としています。

代表理事の田村氏の挨拶にもありましたように縄文街道の沿線には、たくさんの縄文遺跡が残っています。紀元前一万年前後から始まったとされる縄文文化は、悠久の時空を超えて、現代人の心を捉えて止みません。

その魅力はどこにあるのか、ご出席いただいた三人の先生方にお話をさせていただきたいと思います。

まずは大湯ストーンサークルのある秋田県からいらした富樫泰時先生をお願いします。

縄文文化の代表的遺跡、大湯環状列石

富樫 鹿角市の大湯環状列石は、日本の縄文文化の代表的な遺跡の一つで、昭和6年に発見されました。この遺跡を守るため、大湯郷土史研究会が組織されました。ちょうど今から74年前のことです。オーバーに言うと100年近い間、地元の人たちから守られ、現在まで保存されてきました。

昭和17年には、日本神代文化研究所が発掘調査しています。戦後間もなく、考古学者の目に留まり、昭和21年に調査されています。そして昭和26、7年に国営の発掘調査がありました。団長を務めたのが齊藤忠先生で、現在96歳です。ついこの間、13日の日曜に大湯に来て、発掘当時の話を講演なさっております。



大湯環状列石はお墓だとか、キリストのお墓じゃないとか、UFOの基地じゃないとか、地元を含めて、遺跡に来た人たちが、それぞれの思いを縄文時代にはせて楽しんでいます。調査に携わってきた私も、そういう意味で楽しませていただいています。

出てきた遺物を見ると、想像を絶するような、いろいろな物が出ています。その半分近くが用途が不明なものです。用途が不明というのは、私どもが考えて分からないのであって、縄文時代の人たちにとっては、全部意味があったんだろうと思います。それほど縄文人は、私たちが考えるより、いろいろなことを考えながら、生活していたと思います。

縄文人は、自然をよく観察し、自分たちの知恵を生かしながら、楽しんで生活していたのではないかと思います。

大湯環状列石はお墓という一つの固定した見方じゃなくて、広い意味の記念物という考えがあってもいいのではないかと思います。そうした観点からの研究者もおります。秋田県の米代川流域から北、北緯40度に位置する秋田市、岩手の盛岡市、宮古市を境にして、縄文土器の特徴が南と北で違うんです。三内丸山に代表される円筒土器の文化圏は、米代川流域から北にあります。秋田県は、北と南の文化が接触していますし、日本海を利用して北陸の文化が秋田市のほうにどんどん入ってきています。

一 藤川先生、三内丸山遺跡の特色、そしてその魅力はどのあたりにあるのでしょうか。

縄文文化のイメージを変えた三内丸山遺跡

藤川 大湯環状列石はかなり古くから有名な遺跡で、私も学生のころから知っていました。一方、三内丸山遺跡は、言わば新参者です。最近になって名前が知られ、ある意味、脚光を浴びた場所です。

青森県としては、運動公園の隣の土地に、プロ野球が呼べるような本格的な野球場を造るつもりだったのです。ここは昔から遺跡があることが分かっていたので、発掘調査を始めたわけです。それが、平成4年のことです。調査を始めて2年後の平成6年に、でっかい柱が6本、根っこのほうが見つかった。木ですから普通は腐ってしまうんですが、湿地帯といいますか、空気の通らない土壌の中で眠っておった。そして柱の直径が1メートル以上もありましたから、これは何だろうということになった。

その他いろんなものが出てきたので、この遺跡は「すげえー」という話になったわけです。それで平成6年になって、野球場を造るのを止めて、遺跡を残すことを青森県として決めたのです。一塁も三塁もできていたのを壊すわけですから、建設業者に保証金と賠償金を払いました。数億かけて遺跡を残したのですが、それくらいの価値がありました。

調査によると、この遺跡は今から4千年前から5千5百年前、つまり1千5百年間、縄文人が住んでいた場所です。非常に長い間人が住んだ遺跡であることが特色の一つです。もう一つの特色は、大きい遺跡であることです。全部掘ったわけではありませんが、おおよそ35ヘクタールの広さがあります。

三つ目は、平成4年から発掘を始めて、正味1年数カ月間に保存すべき遺物がダンボール箱に約4万個に達しました。普通は一つの遺跡を調べても、せいぜい千箱ぐらいなものだそうです。期間が長い、規模が大きい、遺物が多いというのが特色になったわけです。それで一躍三内丸山遺跡は国内に有名になったわけです。

ピーク時は、年間50万人が見学にきました。何が魅力かといいますと、縄文人がどういう生活をしていたのかということが、だんだん

分かってきたことだと思います。

考古学者の調査研究だけじゃなくて、民俗学とかあるいは植物学とかいろんな学者が調査・研究しています。植物学の先生は「この縄文人は栗を食べてた。その栗も山の木じゃなくて栗の木を植えていた」と言うので「どうして分かるんですか」と尋ねると「DNAから分かるんだ」とおっしゃってました。掘った土を分析してみると、いろんな植物の花粉が出てきた。もちろん魚のトゲも出てきた。そんなこんなで縄文人の生活の姿がだんだん分かってきた。織物も出てきた。それから装飾に使ったと思われる耳飾の翡翠（ひすい）も出てきた。縄文人は野蛮人ではなかったのだ。そこに一つの大きな文化を持った人たちが住んでいたということがいろんな学問、学者の研究から分かってきました。

皆さんご存知の梅原先生がここに来られて、「ここは縄文文明と言ってもいいんだ。世界4大文明と言いますが、5つ目の文明が縄文文明と言ってもいいじゃないか」と、そういうことをおっしゃってました。

縄文人の文明、あるいは文化、生き方がだんだん分かってくることによって、今まで青森県は文化の遅れたところだなあと思ってたんだけど、いやいやそうじゃない。今から5千年前は大変な文化の中心地だったって。県民のアイデンティティーの確立につながった側面があると思います。お墓が見つかった。子供のお墓が特別にあった。そういうことから縄文人の生活の姿と、縄文人の心がだんだん分かってきた。そういう魅力を持った遺跡として最近では評価されています。県内には亀ヶ岡遺跡があります。縄文と言ったら亀ヶ岡と思われていたのが、最近では、新参者の三内丸山遺跡が脚光を浴びていると思います。また、八戸には是川遺跡があり、今まで大きな価値を持っていたと言われてきましたが、三内丸山遺跡にお株を取られたような感じになっています。

— 高橋先生はご自宅の玄関に遮光器土偶のレプリカを飾って、ご自宅の庭に大湯ストーンサークルを再現しているとうかがっています。縄文に惹かれた理由、あるいは魅力をお聞



かせくください。

「縄文の東北」は 大湯から始まり三内丸山で決定

高橋 今お話をうかがっていて、大湯のストーンサークルから始まって三内丸山が「縄文の東北」を決定づけた気がしますね。

大湯のストーンサークルがある鹿角市は、父親が一時期病院を開業していた場所で、帰るたびに大湯のストーンサークルを見物に行っていました。大湯のストーンサークルは、僕らが習った歴史の教科書では、怪奇遺跡として東北で唯一紹介されていました。

東北で生活している僕らにしてみると、唯一の誇りでした。東北は全部負けの歴史で、負けた側は歴史を抹殺されてしまうんですね。今みたいにビデオがあったり、いろんな情報をちゃんと個人が保存する時代だと、これからは例え何があっても現在の歴史は残るんでしょうけど。鎌倉時代とか、そのあたりになってきますと、紙そのもののほうが貴重なわけですから、全部勝った側のいいように歴史が作り変えられていくんですね。

東北というのは、作りたくても歴史を作れない白紙の状態が歴史年表でずっと続いていて、一番最初に大湯のストーンサークルがポツツとある。それで中学、高校のころから、僕にとって大湯のストーンサークルは一種の憧れだったんです。その当時まさしく、富樫さんもおっしゃったように、UFOの基地ではないかと騒がれた時がありました。

鹿角に夏とか冬に休んで帰るたびに、三日に一度ぐらい行ってました。朝に行ってみたり、夕方に行ってみたり、夜に行ってみたりというような感じで。その当時は整備がされてなくて、平気で中に入れました。

夜の八時ごろに行くと縄文の雰囲気を感じたりしました。ストーンサークルは特別な存在だったので、いろんな資料とかを調べていくうちに、いろんなところでストーンサークルが残っていることが分かりました。岩手県の久慈にもありますし、沢内村にもあります。

そういうところを回っているうちに、共通点があるということが分かったんです。それ

は、真ん中に立石があり、その周りに放射線状に石が並べられているわけです。

放射線状に並べられている石は、基本的に山から採ってきた石なんです。真ん中に立っているのは、柱状節理（崩れる時に柱のように縦に割れる状態）と言う種類の石で、谷とか川から採ってくるんです。だから水に関わっている石を真ん中にして、周りに土に関わっている石を並べている。作られている場所は、たいがい山の麓とか、断崖の端っことか、いわゆる境界線上に立っているんです。そしてなぜか二つ作られている。たった一つというのはまずないんです。

東北の考古学はこれからが面白い

垂直に向かっていく立石と水平に広がっていく周りの石の様子をつきつめて考えているうちに、結界じゃないかなあと思ったんです。結界というのは、この世の世界とあの世の世界を繋げる役割をするものです。

なぜそう思ったかという、ちょうど同じような記述が「古事記」の中に黄泉の国と現世つなぐところで、イザナギノ命（みこと）がイザナミノ命をあの世界から、連れて帰ろうとしたが、結局醜い顔になったので、逃げているうちに追いかけて、そこでいろんな防御線を張りますね。

その時にストーンサークルと非常に似た描写のところがあるんです。ストーンサークルが境界線に立っていると考えると、自分たちのテリトリーと外部を隔てる魔よけとして立てられた可能性大きいんじゃないかと思いついたんです。

結界というのは、陰陽道では左の世界と右の世界を一つに合体するためにつなぐわけです。そこはどちらの側でもなくなり、空白になる。縄文の人の考えが分かりませんが、例えば病気が黄泉の世界から来るのであれば、結界のところで留まって入ってこないようにする。後にお地蔵様みたいな形になって、塞の神に変化していったのだろうと僕は思っています。村の入り口にお地蔵様が立っているのは、村の存在を示すのではなく、魔よけなんです。

よけいなものやよそものが勝手に入りこんでこないようにとか、病気がこないようにとか、嵐がこないようにとか、村の入り口のところに塞の神の役割をする地蔵尊を立てることによって防いでいたんですね。

地蔵様の後ろ姿というのは、僕には縄文のストーンサークルの立石そっくりな感じがしたんです。研究者の方たちにこの説を展開しますと、非常に面白いけれど、縄文時代にそういう宗教観があったかどうか証拠がないから、あくまでも仮説にすぎないと必ず否定されました。

文字が残っていないから証拠がないだけで、縄文人も必ず信仰心持っていたと、ずっと主張し続けてきました。

なぜなら、日本は倭の国というじゃないですか。単純に一つの地域のことを倭の国と言ったのではなく、倭というのは日本人の心がそのまま現れた言葉だと思うんですよ。現在我々は日本人とか日本とか言ってますけど、つい最近まで日本は倭の国だったんですね。和食というじゃないですか。和服というじゃないですか。じゃ倭というのは何かと言うと、ストーンサークルの環だと思うんです。縄文人の暮らしは、まさしく和の暮らしだったんですね。

人と人、自然と人間が共存するみたいに、あらゆる和というのをストーンサークルにもあてはめていたろうし、ストーンサークルがあったからこそ日本は倭国というイメージが出来上がったんじゃないかと思います。今から20年ほど前、考古学者がストーンサークルはお墓だと言っていたころ、絶対に墓なんかじゃないということを示すために、大湯のストーンサークルと同じ材料を使って同じ大きさで自分の家の庭に復元したんです。

その後、三内丸山遺跡が出たと聞いた時、僕は狂喜乱舞しました。6本柱の柱穴が見つかったというニュースを見た翌日、発掘調査の現場に駆けつけたんです。その時にストーンサークルとは別に墓があるよだという話を聞かされた。ストーンサークルがもし墓だったとすれば、別なところに同じく墓をつくる必要はないですから、明らかにお墓ではないということが実証されたと思いました。

子供の骨を埋葬する小さな棺が、住いのそばで見つかった。幼い子供を失った時、遠くに埋葬するのは可愛そうだという思いから、自分たちの暮らしている脇に埋めて見守っていた。こういう優しさみたいなものが三内丸山の中からきちんと出てきた。

ストーンサークルから始まって三内丸山までたどっていくと、縄文の豊かさとか、縄文の精神世界とかが相当明確になってきたんじゃないかと思います。

ある人から聞いた話ですが、つい10年ぐらい前まで中央の考古学者は、東北にどんなものが出てきても関心を持たなかった。東北を発掘して研究しても、学問的成果に結びつかなかったらしいんです。それが三内丸山遺跡が出てから一気に学会の流れが変わって、東北が一番面白いということになり、東北を研究する考古学者が増えている。ですからある意味で縄文研究というのは、本当に始まったばかりです。これからどんどん東北は面白くなっていくんじゃないかなという気がします。

— ありがとうございます。大湯、三内丸山のところをお話いただきました。ストーンサークルは、招かれざるものを阻止するバリアの役割を果たしているという高橋先生のお話だったと思います。先ほど富樫先生のお話の中で円筒土器の文化圏というお話が出てまいりました。もう少し詳しくお話をください。

縄文以来の伝統文化が息づく東北

富樫 縄文時代はだいたい1万3千年ぐらい前から1万年ぐらい続いた。そして各地でそれぞれ生活し始めるわけですけど、縄文土器がつくられるようになってから、6千年から7千年ぐらいになって地方色が出てくるんです。ちょうど三内丸山遺跡に人が住み始めたころと考えていいと思います。日本全国でだいたい6つから7つぐらいの土器の文化圏が出来上がった。その代表的なものが東北の北部と北海道の南部・石狩平野から米代川流域、秋田、盛岡、宮古を結んだ線の北の方です。ここでは、小さくても大きくても、徹底的に筒型の土器が作られています。その形から円



筒土器という名前が使われている。他の場合は全部遺跡の名前をとっています。例えば青森の亀ヶ岡遺跡は、亀ヶ岡式土器と名づけられています。円筒土器の分布の範囲では徹底して筒型土器が作られている。それが弥生時代になっても、古墳時代になってもです。古代になって日本海側の秋田には秋田城が造られ、太平洋側の盛岡には志和城とか徳丹城が造られるんですが、それより北にお城は造られません。縄文以来の非常に強い伝統文化が北東北にはあったからじゃないか。例えば律令国家時代になると、南からどんどん支配地域が北上してきますが、北上しきれなかったのは、縄文時代以来の伝統文化が城を造らせなかったんじゃないかと思われま。多分現在も、そういう形のものが続いているんじゃないかと考えています。

— つまりは大湯のストーサークルの結果が、ぎっちりできていたということになるわけなんですね。先ほど富樫先生のお話の中で半分以上の遺物が用途不明だというお話がございました。例えばどういう物がございますか。

想像力豊かな縄文遺物、 半分以上は用途が不明

富樫 考古学をやっている人たちは、用途不明のものは、例えばお祭りといったところへ全部押し込んでしまいます。けれども用途が不明の遺物を第二の道具に分けている考古学者もいます。動物の足の形を土器の底につけたものがあります。何かしらの器であったのは間違いありませんが、用途が分からない。鯉節だとか石鱈だとか、つばめの尻尾のような形をした石器もありますが、用途は分からない。それらはA B型石器という言葉で表現しています。

— 高橋先生、未知なるがゆえに惹かれるものは。

高橋 急須みたいな形をしたもので、注ぎ口がおちんちんのような形をしたものを見たことがあります。小便小僧のようなものです。

あれで飲んでおいしいかどうか分かりませんが、ちょっとショックを受けました。遊んでいるなあという感じがして。

富樫 やっぱそれをイメージしているのだと思いますね。

高橋 ああいう発想は、弥生になるとないですよ。弥生になると非常に合理的になって、シンプルで美しいけれども、「たくさん同じものをこしらえて、安くあげました」みたいな感じの文化になっていくんです。縄文は手が込んでいて、一人ひとり遊びながらこしらえて、ちゃんと設計している、そんなすごさがありますね。

富樫 土器を見ていて楽しいですね。

高橋 僕も一つ用途が分からないものを持っています。見た感じは吊るすランプみたいな形なんです。下の方に台みたいなのがありまして、上に耳飾りのように紐を通すような穴が三方に開いている。見た目は宇宙船というか空飛ぶ円盤の形をしています。紐を通して振ってヒュンヒュンと音を出し、例えば獲物を追うときに使ったんでしょうか。

またぎの藁神様のような、ああいう感じのものを土器でこしらえたのかもしれませんが。見ていてすごく面白いです。三内丸山から出た遺物の中に、胴体の真ん中に穴が開いた平べったい形の土偶がありますね。なぜこんなものをこしらえたのか不思議な土偶ですよ。

小原 出産もそうですし、豊穰への願いが込められていたんじゃないかと言われてます。

富樫 土偶はほとんど女性が多いわけですけど、おなかの大きい妊婦を表現したのがあります。豊穰祈願とか安産とか言われてますが、最近では、同時代の人たちが持っている精霊を具体化したものじゃないかという考え方も出てきてます。土偶も時代によって、場所によっていろいろな使われ方をしたんじゃないかという気がします。

— 藤川先生、北東北には、未知の要素があると思いますがいかがですか。

藤川 東北は、初めはエミシと言ひ、その後エゾと言われるようになった。学校で習う歴史では、平安時代とか中世のころのわれわれのふるさとの姿は、習わなかった。

陸奥は、道の奥であって、政府の管轄の届かない外の世界であるというような感じで、歴史にはでてこない。日本の国は、神武天皇が長髓彦（ながすねひこ）と安日彦（あひひこ）兄弟を倒してできた歴史の教科書で習った。安日彦が逃れてきたのは八幡平の安比で、津軽には、長髓彦が逃れたという伝説があります。

その伝説はどこに書いてあるかといえば「東日流外三郡誌(つがるそとさんぐんし)」に書いてある。昔からあったのが昭和50年代にこの世に現れたんです。その中に長髓彦が津軽に逃れてきたと書いてある。多分うそでしょう。

でも、「東日流外三郡誌」に書かれている未知の部分に対して大変興味がある。長髓彦は、なぜ北に逃げてきたのか。人のいないところに逃げてくるわけがないから、北には大和地方にはない縄文から伝わっている別の文明があったのではないか。

つまり東北地方は、ある文化の花咲く地であったのではないか。伝承とか今は偽の歴史書と言われる物をもう少し研究することによって、あるいは、いろんなところを発掘することによって何か一つでも二つでも真実を証明するものが出てくるんじゃないかと思います。火のないところに煙は立たないといいますが、伝承も何かしらの根拠があるんじゃないかと思います。子供のころの子守唄に「泣けば山からもっこくる、寝ろじゃ寝ろじゃ」という歌があります。

泣けば山から、怖い者（もっこ）がくるから早く眠りなさい。もっこというのは蒙古のことなんです。なぜそこに突然、蒙古が出てくるかと言うと、蒙古が日本に攻めて来た文永の時に青森県の十三湊（とさみなと）にいる安東水軍が鎌倉幕府の命によって、はるばる九州まで行った。しかし、あの神風によっ

て元の船も沈んだけれど、青森県から出かけていった船も全部沈んでしまった。だからもっこというのは怖いんですよ。

その次が面白い。「泣かねば海から早帰る」と言ったんです。安東船に乗って出かけていったお父さん、おじさんが帰ってくるよというのが、昔から伝わっている子守唄なんです。それを作詞した人は昔の人ですから、何か根拠があって作ったかと思っています。その根拠を早く証明してほしいと思っています。十三湊の発掘が始められています。少しずついろんなことが分かってきています。子守唄の根拠が分かると、面白いと私なんかは思うわけです。

古代東北は重要な文化圏、 青森県に「日本中央」碑

高橋 「東日流外三郡誌絵巻」という絵があるんですね。その中に三内丸山の絵があるんです。城柵のような感じですが、そこに6本柱の建物がかかっているんですよ。どんな想像力がたくましいといっても、昭和40年代あるいは50年代初めに三内丸山に6本柱の巨大な建造物が造られていたということを目撃した人なんて誰もいないと思います。それを考えると東日流外三郡誌を真剣に再検討すべき価値があるんじゃないかという気がします。

藤川さんがおっしゃってた安日彦、長髓彦がなぜこっちに来たかというのは、長髓彦は、饒速日命（にぎはやひのみこと）の妹と一緒に来たんです。饒速日命は秋田の唐松神社に残されている「物部文書」をみると、饒速日命が一番先に日本の中で攻撃したのが今の秋田県なんです。そのあと都に出て行って河内を中心に勢力を伸ばしたと書いてある。

饒速日命の本拠地が秋田県であったとすれば、奥さんの縁故をたどって東北に逃れてきたというのも、全然不思議じゃないですし、安日彦は八幡平のあたりに勢力を築いていたというのは多分確かだと思うんです。安部氏というのは多分安日彦からきてるんですね。岩手のエミシの始まりは、八幡平の周辺から始まったのだというふうに言われています。

荒唐無稽な話ですけど、八幡平が邪馬台国



だったという小説もつい最近出ました。どこまで根拠があるかというのは疑問ですけど。僕も一時期、東北に邪馬台国を持ってくる話を皆でつくろうとしたことがありました。古代東北は、すごい重要な文化圏であったというのは間違いのないわけで、あながち邪馬台国がこっちにあってもおかしくないと思います。

青森県の話で突然思い出しましたが、野辺地の近くに「日本中央記」という石碑がありますね。伝説では坂上田村麻呂が津軽の中央まで攻め込み、エミシを平定した記念に岩を選んで矢じりで「日本の中央」と刻んだという伝説が残されています。

田村麻呂は青森まで行ってないので、次の将軍の話なんでしょうけど、「つぼのいし」あるいは「つぼのいしぶみ」として、たくさん歌詠み人がこれを歌にしています。明治天皇が徳川幕府を倒して新政府をこしらえた時、何を思ったか青森に行くのであれば、つぼのいしぶみを見たいと言ったんです。それで山県有朋あたりが青森県知事に命令して、つぼのいしぶみを探せという命令を出して、探させたが、結局見つからなかった。

昭和になってから偶然、畑のところから「日本中央」と刻んだ大岩が出現しました。これぞまさしく、つぼの石なんだろうということで小屋を建てて祭ったわけです。たまたまその周辺を小説の取材で行っているときに、青森県の観光課の方に「日本中央碑」をぜひ見たいと話したら、観光課で知らないんですよ。「本県が日本の中央なんておかしいですよ」と言ってね。僕はそれを聞いて非常にガッカリしました。その岩が本物かどうかはともかくとして、多くの人が長い間青森県に日本中央碑があると信じ込んできたという歴史が大事なんです。

それを完全に忘れてしまって、こんなところが日本中央であるわけがないというのは、自分で自己否定です。そういうことでは観光課の役割を果せないと怒ったことがあります。

藤川 多分、青森で先生がお会いしたのは若い方だと思います。三陽法師の短歌集につぼのいしが出ています。思い出して書き留めてきました。「陸奥の おくゆかしくぞ おも

ほゆる つぼの石文 そこの浜風」。陸奥というのはゆかしいんですよ。ゆかしいから行ってみたいというのが三陽法師の思いなんです。旧天間林村（東北町）に坪という集落があります。4号線の改修のときにちゃんと飾られました。日本中央碑は確かにあります。今の観光課は覚えていると思います。

小原 「りくおう」書いて陸奥。これは、政権からみてのことです。岩手県がなぜ岩手と言うかと言いますと、盛岡の三石神社に鬼の石の手形があるからではなくて、イ果ての国である。イというのは海軍という意味で、大学時代に教わった教授が一回だけポロツと言った説です。どなたも引き継がないので、私が常に言っている言葉です。

高橋 陸の奥と書いてどうして「みちのく」というかご存知ですか。これは奥の区分の名残なんです。東北に6つの国を制定したことから来ているのです。

— つまりわれわれは大和政権の洗脳を受けて、文化果つる地だと、化外の地におるんだと思っていたのが、実は日本の中央にいたということだと思います。縄文の遺跡から北海道の黒曜石が出たり、秋田のアスファルトが出たり、新潟の翡翠（ひすい）が出たりという具合に実に広域的な多くの交流がなされていました。富樫先生、解説していただくとどうなるのでしょうか。

広域で交易していた縄文時代

富樫 縄文人は、アスファルトが水に大変強く、接着剤として非常に効果があるということを知っていました。ですから三陸や松島湾沿岸の貝塚から、アスファルトを接着剤に使ったという痕跡の遺物が、たくさん出てまいります。三内丸山に村がつくられて間もなく、天然のアスファルトをそういうかたちで使えるんだということを縄文人が発見するわけです。土偶の目にアスファルトをはめこんだものがあります。土器にひび割れを防ぐために、ひびにそってアスファルトを塗っ



たものもあります。急須のついた注ぎ口を接着するためにアスファルトを使っているというものがあります。現在の秋田県潟上市の槻木という場所から、天然のアスファルトが採れ、それが縄文時代に使われています。この地域の人々がアスファルトを採取して、はるばる運んだものなのか、あるいはそれを知っている人たちが取りに行行って運んだものなのか、まだ未解決です。

— アスファルトを使った遺物が広域に出たわけですね。

富樫 それが相当広い。例えば太平洋側では福島の方から北海道の日本海側までずっと出ています。アスファルトは太平洋側にはありませんから、縄文人が運んだのは確かです。

— 「炎立つ」とか「火怨」とかの一連の作品をみますと、縄文の精神を引き継いだ作品が多いような感じがします。

風土が形成する東北の気風は太古から不変

高橋 文化というものの継承というのは難しいので、一番変わらないものは何かというと、風土がこしらえる人間の心持は、100万年前でも変わらないと思うんです。岩手とか東北の人々の考え方、シャイな文化とか、中に芯みたいにかちんと持っているものとか、独特のものはひょっとすると縄文の精神がわれわれの中に残されているかもしれないことを思いつきました。

東北人の今の心を書くことは、エミシを書くことと一緒にしようし、エミシを書くことは、縄文人を書くことになるだろうという信念で書きました。大湯のストーンサークルが建立された時代を舞台にした短編小説も書きましたが、その時も今のわれわれと同じという考えで縄文の人たちの考えかたを書いて、違和感は全然なかったです。

ただ、縄文人は非常に特殊なので、縄文の生活を描くのは、すごく難しいと思った。原生林に入り込み、縄文人の気持ちになって道具をこしらえたみたいなのをやって、自然の豊かさを改めて感じました。東北には何でもあるよと。短編小説を書いていて学んだことです。

— 高橋先生は活字を通して縄文の風土を全国に発信しているわけですが、藤川先生、三内丸山発信の会として、どのような形で縄文の良さを全国に発信しているのですか。

世界に向けて情報発信、 世界遺産登録を目指す

富樫 私どもの会は、NPO法人です。先ほど申し上げたように、平成4年に始まった発掘が平成6年になりまして、全国的に注目されるようになった。

その時に東京から来た識者の先生方から「あなたがたも地元で何かやったらいいでしょう」とアドバイスをいただいたんです。発掘は行政がやるもので、民間人は見ていればという感じでしたが、そのように言われて「なるほど」と思いました。われわれに出来ることがあれば何かやろうじゃないかということで、いくつかの団体ができました。その一つが、遺跡を案内してくれる三内丸山応援隊です。会員の中には、実際に発掘した人もいます。発掘作業には一番多い時で600人が従事しました。近くのおばさんやおじさん、あるいはおばあさんまでが土を掘ってくれた。その場所が全国的にワッと有名になったら、おばさんやおばあさんたちは「何かしよう」ということになって、いくつかのボランティア団体ができました。われわれは、できる範囲



で情報を発信しようと、冊子を毎月出すことにしました。10年になります。121号になりました。現在、会員は300人。このうち東京・首都圏が半分ぐらいです。大阪方面もおります。県内の方は4割ぐらいです。会員一人に3部送ります。自分で一部、あとはみなさんにばらまいてくださいという形です。最初から和文と英文と併記しました。外国の方にもこれが発信されています。外からの発信を受けて、さらにわれわれが奮起するという、作用があります。外に発信することがひいては、自分たちの自覚につながっていくという考え方で、やってきました。最近、世界遺産に指定してもらおうという話があります。この冊子をもう少し世界に広くばら撒きたいと思っています。縄文を発信することで、その効果が自分に返ってくる。そういうスタンスでやっているつもりです。

— 今、世界遺産の話が出ましたが、登録前にクリアしなければならない問題があると思いますが、富樫先生、助言、あるいは提言がございませうか。

富樫 北東北三県と北海道の4道県で知事サミットをやっております。その中で北の縄文回廊を何とかしようという話が出ました。それぞれの道、県で専門家とか遺跡を大事にする活動をしている人たちに集まってもらい、昨年、委員会ができました。北海道から始まり、岩手県まで一巡したら、結論を出すことになっています。青森県の委員会では、北東北と北海道の縄文遺跡を世界遺産に登録すべきだという結論に達しています。運動ですから、大いに楽しみながら進めたほうがいいという形に今なってきました。それから大湯環状列石ですが、環状列石が乗っている台地には館跡がないんです。中世に鹿角の小さな盆地に、館跡が60ぐらいあるんですが、大湯の環状列石があるところだけは館跡がないんです。あそこにいる郷土史家の安村先生の話では、小さいころ、ここにはクワを入れちゃだめだという話があったというんです。台地の先端部には「枯草坂古墳」があります。ですから大湯の環状列石は、お墓じゃなく、精

神的な世界があって、縄文以来から延々と続いているんじゃないかという気がしています。

— そういう精神性というのは何千年もの時空を超えて受け継がれているということになると思います。最後高橋先生、世界遺産登録を目指す、つまり縄文街道が基点となつてという意味合いで何か助言がございましたらお願いします。

高橋 日本は慎重すぎるんですよ。世界遺産の登録というのは、審査の段階で各国世界がたくさん出してますけど、あれでいいですよ。日本の場合は予備審査というものがあって候補に選ばれたものを出すと100パーセント通っているんです。日本の国内で候補になるのが大変であつて世界遺産になるのは、そんなに難しくない。三内丸山ぐらいの規模であれば当然、日本の候補になれば世界遺産にすぐなれる。ただ、登録の範囲が広すぎるのがちょっと引かかるかもしれません。三内丸山のすごさは全世界に伝えたほうがいいし、伝えることで東北が変わっていきますね。だから東北全体で応援していかなければいけないと感じますね。

— われわれが外に向かっていかに情報を発信していくかに帰結するかと思います。例えば、縄文街道といいますと、人的交流とか文化的な交流がないと、いくつかの遺跡が単に転々と存在するだけです。いかに線で結びつけて、面としていくかということが私たちの目の前に突きつけられている課題じゃないかと思います。こうした機会となるのが、本日第1回となる未知の国縄文街道のサミットではないかと思います。これを機会にわれわれも全国に発信して行って、世界遺産登録を夢に終わらせないようにしたいと思います。ちょうど時間となりましたので、これで終わらせていただきます。皆さん、大変長い間どうもありがとうございました。

第2部 沿線市町首長による広域連携サミット

テーマ 「^{みちのく}未知の国からの発信 新たな時代の観光と連携」

オープニング：
津軽三味線の弾き語り
奏者 松田 隆行氏



パネラー



大鰐町長 二川原和男氏
にがわら・かずお



小坂町長 川口 博氏
かわぐち・ひろし



浄法寺町長 清川 明彬氏
きよかわ・あきよし



八幡平市長 田村 正彦氏
たむら・まさひこ



オブザーバー



鹿角市議 吉村 アイ氏
よしむら・あい

コーディネーター



田村 麗丘
たむら・りきゅう



司会 お待たせ致しました。それではさっそく第2部に移ります。第2部は「未知の国からの発信、新たな時代の観光と連携」と題して、縄文街道沿線市町村首長と縄文街道沿線で精力的に活動されている方々による広域連携サミットです。本日出席いただいておりますのは、小坂町長川口博様、大鰐町長二川原和男様、浄法寺町長清川明彬様、そして地元八幡平市長田村正彦様です。ここで皆様にお断りを申し上げておきます。鹿角市市長の児玉一様は次回開催予定地として最後まで出席の方向で調整いただきましたが、残念ながら調整つかず欠席となりました。そこで急遽、長年北東北広域連携推進委員として、またNPOとして活躍され、この春女性初の鹿角市議となられました吉村アイさんを市長サミットプラスということでお招きいたしました。第2部のコーディネーターは風景の生命を守る地域づくりネットワーク代表理事の田村麗丘が務めさせていただきます。それではさっそく首長サミットよろしくお願いたします。

— 催しのタイトルにあります首長サミットのパネルディスカッションに入ります。

今回、この催しを企画するに当りまして縄文街道沿線の18市町村の首長さんに参加を呼びかけました。その際直接お会いでき、思いの伝わった4人の首長さんにお越しいただくことができました。青森県が大鰐町、秋田県が小坂町、そして岩手県が浄法寺町に地元八幡平市長と何とか3つの県にわたる市町村の首長さんに大変お忙しい中ご参加いただきました。ここに改めて感謝を申し上げます。

私どもは「生命との共生」その「バランス」を大きな活動のテーマとしております。縄文文化を一言で言えば、私は豊穡への願いや自然の恵への感謝など、自然に生かされているという人間の素朴な感情や生き方に根ざした「生命の文化」だと考えておまして、それは現代の生命を経済に変える対極にある文化とバランスさせる際の大きな視点、手がかりになると考えております。

今日の催しの構成も主に左脳を刺激する鼎談やサミットと、右脳を刺激する先ほどの津軽三味線、そしてこのあと第3部の子どもた

ちの踊りや音楽など心を癒す要素を交互に織り込み、左右の脳をバランスよく刺激してみようと試みました。この縄文街道の提案者として、その大きな思いといたしましては、これまで「縄文」というとどうしても「縄文時代」という歴史的な価値だけにスポットが当たり、学問的な視点での議論が中心でした。しかし、地域づくりなり、環境教育なり、今世界が求めている共生への手がかりなりを誰もが縄文文化から得、そして参加しようとするれば、漆の文化に代表される縄文街道沿いに色濃く残る「生きた縄文」の文化の遺産やメッセージにもスポットを当てるべきだと考えます。それらを掘り起こし、活性化させ、発信する必要があるのではないかなと思います。

さて、先ほどの鼎談で「未知の国」という北東北三県全体の視点でお話をいただきましたので、今度は縄文街道沿線からの視点で、現実の世界でいろいろ苦勞されている首長さんに、この縄文街道なり、未知の国というものに対するご意見を賜りたいと思います。

まずはお一人ずつ地元の紹介方々お話をいただきたいと思います。最初は青森代表として大鰐町からお願いしたいと思いますが、大鰐町は秋田県との県境に位置し、なんとと言っても温泉が有名ですが、今日は温泉だけでなく、縄文遺跡も含めていろいろなお話をご用意されておられるようですのでよろしくお願いたします。

縄文以来の伝統文化が息づく町

二川原 大鰐町から来ました二川原です。今回のサミットは三県をつなぐことがメインテーマだと思います。縄文のみならず、その後の歴史時代の文化の痕跡を見ても、「東北」は長いこと互いに交流し、文化を共有して助け合っていたことが判ります。私達は、もう一度そのことを噛み締めてみる必要があるのではないのでしょうか。そういうことからしますと、それぞれの地域論の中締めが必要だと思います。そこで、私どもの町がどんなところか、少しご紹介させていただきたいと思ます。

今回「縄文街道」という名前をつけていた

でしたが、名前の付け方は大事で、何となく行ってみたくなるような名前の付け方で、大変上手だと思いました。何となく魅力的に感じられます。



(地図のスライドを映しながら)。これは北西から南東の方向を見たものです。向こうの端に見える山が青森県の県境です。その向こう側が小坂町です。私どものまちは、南東に碓ヶ関と接し、北側に津軽平野が広がっています。町内を流れる平川は、津軽平野に水が流れ込んでいます。

人口が1万2千人の小さなまちです。JR、国道7号、高速道路の全てが、大鰐を通過点としており、大鰐は、津軽の入り口、あるいは玄関口と言われています。白神山地まで一時間、青森市にも一時間、十和田湖にもおよそ1時間で行くことができます。

800年とか400年の歴史を誇る温泉郷がごございます。江戸時代から温泉水をつかった野菜の栽培をしてきました。温泉もやし(津軽藩主が湯治したときに、必ず献上したとされる伝統栽培の野菜)は、一週間で約3センチ伸びます。このほか、大豆もやし、そばなどを栽培しています。中山間地帯ですので、りんごも栽培しております。

阿闍羅(あじゃら)山は、今から約500万年前に基礎ができ、約200万年前に今の形になったと言われています。平安時代は信仰の山として崇められたと言われています。大正時代に入ってからスキー場(大鰐温泉スキー場)ができました。日本でたった一つのスキー神社があります。

阿闍羅山麓にある茶白山自然公園は、ツツ

ジの名所で春になると、見事な花をつけます。その数は1万5千本。町内の子供たちが中学一年生になった時、ここに来て一人一本ずつ苗木を植樹しています。秋は紅葉の名所でもあります。

秋田県大館市との県境に数十メートルの大きな岩があります。先ほどイワの語源論がありましたが、津軽には岩木山があり、岩、石というのに対して信仰めいたものがあるのかもしれませんが。

それからいろんな祭りがありますが、その中の一つにねぶたがごございます。ねぶたと言えば、青森、弘前が有名ですが、もともとは、土着の人たちの火祭りです。青森市や弘前市は、歴史的に新しくつくられたまちです。ねぶたは、周辺地域の土着の人たちの祭りが大きくなり、発展していったと私は思っています。

町のなかには、中世の館を含めて40カ所の遺跡があります。縄文だけだと、その3分の一程度でしょうか。先ほど三内丸山は千五百年ほど続いたと言っておられましたが、大鰐には縄文中期から平安時代まで、5千年ほど住み続けた形跡の遺跡がごございます。生活しやすかった証だと思います。住居跡では、大きなもので9.1メートル×12.2メートルというのがごございます。しかも、何回か建て直した形跡があります。

阿弥陀如来像は阿闍羅山にあったものをふもとに移したものと伝えられています。制作年代、作者不明です。室町時代に足利尊氏が、それまでの戦争で亡くなった方々を弔うため、阿弥陀如来像を全国64カ所に作り、その一つが大鰐といわれています。

大鰐というのは、聞いて変な名前だと思われるかもしれませんが、記録によると、平安から鎌倉時代に「大阿弥(おおあみ)」と書いている。それが、だんだん変化して、室町時代には、だいあんこくじ(大安国寺・おおあに)」という表示になり、江戸になると大鰐になりました。阿弥陀如来像を創るよう指定されたという意味で「おおあに」を「だいあんこくじ(大安国寺)」とつけたという、いわれがごございます。

平安以前はどう呼ばれていたかと言えば、



阿弥（あに）という言葉は、秋田地域にありますが、大きな森のある谷という意味だそうです。私どもの地域も似たように当て字みたいな形で使われていたのではないかと思います。私どもの地域はこのようなところですよ。

— 今のお話でこれまでの温泉の大鱈というイメージからだいぶ膨らんだのではないかなと思います。では引き続き小坂町にうつりたいと思います。小坂町は康楽館という古い国指定の建物や十和田湖などが有名ですが、そのほかいろいろ知らないお話があると思います。よろしく願いいたします。

命の輪をつなぐ循環型町づくりを目指す

川口 ただいまご紹介いただきました小坂の川口と申します。実はこのサミットに出席するようにということで、田村さんが役場にお見えになって、熱心にこのサミットの持つ意味と基本理念を私に情熱を持って話をしてくれました。私は町のことでいっぱいですから、最初、引き受けるつもりはなかったのですが、二つの理由でお引き受けしました。一つは、今言いました田村さんの熱意です。もう一つは、小さいまちですので、自分のところだけで良くなるうとしても限界があります。そういう意味で可能な限り、いろいろな方々と意見を交換し、明日からのまちづくりに備えていくのが大変重要なことだと思い、参加させていただきました。

うちの町は人口6800人という小さな町です。面積は178平方キロです。特色は、鉱山の町として大変栄えたことです。明治のころからどれぐらいの商いをしたかと調べてみたら、ちょうど県財政の8倍です。今、県財政は7千億ぐらいですから、その8倍の商いをした大変裕福なまちだったわけです。先ほどお話いただいた康楽館（日本最古の木造芝居小屋）は、職員のための福利厚生施設です。一生懸命働いてください。その代わり歌舞伎を、映画を、いろんなものを楽しんでくださいというのが康楽館の役目です。また旧小坂鉱山事務所（国の重要文化財）は、私たちの事務所です。これらは、いずれも平成15年に

国の重要文化財の指定を受けました。大昔じゃないですが、明治、大正の歴史的な建造物にいいものがあった。またそれを保存させていただいているのも一つの特色だと思います。

小坂は、今年町制施行50周年でした。50年間を振り返って将来、どういう骨格のどういう顔つきのまちにしていくのか、みんなで考える50周年にしようと、およそ一週間シンポジウムを開きました。

ほかのある地域では、鉱山で栄え何兆円という仕事をした、ある地域では石炭で大きな仕事をした、またある地区は遠洋漁業で地域が大変豊かになった。そういう地域は世の中にたくさんありました。しかし、基幹産業がなくなったらゴーストタウンになってしまったという例がほとんどです。

うちの町は、今までの鉱山の蓄積をどう生かすことができるかを一つのテーマにしています。大練りで言うと循環型社会にしようということにしました。今から7年前の1997年、循環型の町づくりを目指すことを目標に掲げました。鉱山の町で大変大きな商いをしたのですが、宝の山を掘ってしまったら、何もなくなってしまいました。そういうやり方は一方的で賢くない、ですから、どうやったら循環型に戻ることができるかということです。

もう一つは、なぜ鉱山がつぶれたかといいますと、1985年にニューヨークのプラザホテルで開かれたサミットで、為替レートをドル安で進めることに合意、1ドル240円が120円になり80円の円高になりました。

それで日本の鉱山はほとんど潰れてしまいました。小坂の町、小坂の経済、社長さんもお客様も、いくら一生懸命やっても世界の経済、世界の為替という大きな流れの中であつという間にたたまれてしまったんです。小さい町ですが、世界の経済と小坂の経済は同時制を持って進んでいることを頭に入れて、これからの地域を経営していかないと、大変なことになるという反省があります。

宝の山も掘ってしまえばなくなるんです。小坂で精錬してたんです。日本を代表する、世界に誇る鉱山として、九州鹿児島県に石狩鉱山（住友鉱山の山）という金鉱山があります。金鉱石1トンの中に30グラムから50グラ

ムの金が入っていますが、それを小坂の精錬所で精錬しています。金の生産量は毎月1トン以上、銀は毎月50トン以上です。

今、子供も携帯電話を持っていますが、携帯電話1トンの中に約100グラムの金が入っています。小坂では、そういうリサイクルの整備基盤も行っています。(精錬所で扱っている金銀銅の20パーセントがリサイクル原料、その中に携帯電話の基板に使われている金が含まれている)。

循環型の町づくりを目指していますが、例えば日本人のような生活を全員地球の方がしたとすれば、地球が2.6個必要になるそうです。地球は一個しかないわけですから、このような生活をしていると、限りなくおかしな方向にいくことになります。1980年代は、0.8個から0.9個だったそうです。われわれの食べるものを、生活を、経済を、産業が許容範囲に収まっていたそうです。現在は1.2だそうで2割足りない。アメリカのような生活をしたら、地球は5.6個必要だそうです。地球が5.6個なんてつくれるはずがない。木の葉一枚作れないのですから。そういう意味でわれわれも欲望の生活をちょっと我慢して、抑制するような、そういう生き方をしなければならぬ時代になったと思います。

例えばお米1キロ作るのに、江戸時代ならば230キロカロリーぐらいでできたそうです。今は、耕運機だとかトラクターだとか、人間が楽している分、10倍の2300キロカロリーの原材料がかかっているそうです。だからと言ってわれわれが江戸時代の生活に戻って、手とかクワや鋤でやれるかと言えば、なかなか期待できないと思います。では縄文時代に遡っているようなことができるかといえば、これもなかなか難しい。

いい暮らしを我慢して抑制していくのは至難の技だと思いますが、少なくとも地球上の生物の循環の輪を食いぢらないような、そういう生き方をしていかなければならないと思います。

次は生ごみですが、「私生ごみを出す人、あとは役所が片付ける人」では問題は解決しません。先ほど心とか命の話が出ていました。生ごみを微生物に食べさせると、命がよみがえ

ってきます。それを焼却炉で燃やしてしまう従来のやり方は、命をなくしてしまうだけです。

生ごみを微生物に返して、大地に戻し、もう一回作物の役立てるように、命を循環させることが大切だと思います。生ごみの命さえ守れないのに人間の命が守れるはずがない。そういうことで自分たちでできることは、自分たちでやってみる。住民一人ひとりが、できることをやれるまちづくりを目指しています。今年3月から全集落を回って今のような話をしています。財政的に厳しいですが、いろんな方法があるはずですよ。うちの町はそういう方法をとらせていただきました。

われわれが一個の地球の中で上手に生きていくためには、石炭とか石油とかの化石燃料に頼る生活を早く引き上げて、例えば八幡平には絵の具の色をとってしまう微生物が見つかっています。白神山地の微生物からは、パンをおいしくする酵母菌が見つかっています。私たちの知らない生き物の力を借りることによって地球の環境を守るよう、もっともっと生物の力を借りる必要があると思います。生物の力を借りるためには、森を守ったり山を守ったり、木を守ったりしていかなければならないと思います。

50周年記念事業の一つとして、小坂の子供たちに世界で一番古いメソポタミア文明がなぜ廃れたかをテーマにしたお芝居を康楽館で見せました。メソポタミア文明が滅びたのは、いろんな山の木を伐採したのが一つの原因だそうです。小坂では、はげ山を元の緑に戻すために、アカシアの木を植樹しています。3千年の時を経て、メソポタミアのようにおかしくしないためにはどうするか、それを演劇で二時間、小坂の子供たちに見てもらいました。いずれにしても、自分たちでできることは自分たちでやり、もっと大切なことは、隣近所とよく連携していくことだと思います。その意味で今日はせっかくの機会なので、まちづくりの糧にしていきたいと思っています。

— 康楽館や小坂鉾山が古ぼけた遺産ではなく、新しい視点で生命を与えられ、生き生きとした最先端の輝きをもっているというお話



は新しい発見だったと思います。先日大船渡市の太平洋セメントさんで環境アドバイザーとして講演をさせてもらったのですが、これまでセメントは自然破壊のシンボリック存在だったわけですが、今は環境に重点を移し、完全なりサイクルの工場に変身していることに大変驚きました。これまでの一方的な開発視点から、生命の循環や地球的発想をすることで、最後から逆に先端に立つことができる参考事例だと思います。

さて、浄法寺町という名前は東京でも漆で知っておりました。漆の文化がなぜ岩手の奥深いまちに継承されてきたのか興味があります。先ほどお話ししましたが、「漆」は生きた縄文文化のエッセンスだと考えておりますので、是非参加いただきお話を伺いたいとお願いしておりましたのでよろしく願いいたします。

日本一の漆とどぶろく特区の町

清川 ご紹介いただきました岩手県浄法寺町の町長の清川です。よろしくお願ひします。今日は主催者の田村先生にお招きいただいて来たんですが、何とか来て本当に良かったなと思いました。先ほど三人の先生方のお話に感動しました。世の中には知らないことがたくさんあるなあ。もっと若ければなあ。時間が欲しいなあという気がします。

先日、漆器協同組合の青年部の皆さんが来て、漆業界が低迷しているので、何とかして生きる道を探りたい。産地の浄法寺に来たら何かヒントが得られるのではと思って来られました。11月13日に漆器祭りがあるので、ぜひ来てくださいと招待を受けましたので、和歌山に行ってきました。行ってびっくりしたのは、漆器と言いながら漆を使っていないんです。合成樹脂に化学塗料を吹き付けて漆器と称している。しかもほとんどが中国製品なので驚きました。去年、友好関係を結ぼうという意味で直径40センチぐらいの漆の木を8本ほど送りました。

今回行ったらその木を製材しまして板にして、漆の木で作った器、要するにお酒飲む時のぐい飲みとか、そういったものを吹きうる

しとか、焼き付けたり、焦がしたり、様々な物を並べていました。これが、ものすごく好評で、売れゆきがよいので、びっくりしました。

浄法寺に戻って14日に漆の木を植樹しました。浄法寺では「漆の日」というのがあります。毎年11月13日に明治神宮で漆の苗をお払いしてもらい、それを植えています。植林した面積は100ヘクタール、本数にして20万本の漆の木があります。漆の木は、苗木を植えてから搔（か）きとるまで15年かかります。それを搔くと漆の命は終わりです。それを搔き殺しといいます。なぜ1年で終わりかという、江戸時代は養生搔きといって、少しずつ何年も搔いたのですが、養生搔きだと量がとれないのに、質が悪いことが分かりました。

明治時代に福井から来た漆搔き職人が、搔き殺しを指導していき、今はそういう搔き方になっています。大変困ったことに、日本で消費される漆は、一時は200トンになったのですが、今は100トンを切ってます。そのうちの99パーセントが中国産、あるいは中国を経由してベトナムのほうから入ってきてます。ほとんど国産の漆を使っていないのですが、国内で生産される漆の7割から8割が、わが町で生産されたものです。漆成分の漆オールが一番多く含まれていて、品質も日本一です。浄法寺の漆は、ねばりがあって、光沢と透明度があるのが特徴です。値段が高いと言われますが、私は高くないと思います。15年かかって、これで一杯分しか樹液が採れません。それを精製すると半分ぐらいに減るので、いくらも塗れません。ですからお椀一個の値段が、7、8千円になる。

昔東山町に、教育の神様で知られる菅原道真の奥さんが住んでおり、奥さんを守っていた小さな社を大きなものに建て替えるという話を聞きました。天井板に漆を塗りたいという話を耳にしたので、「どうせ塗るなら、浄法寺の漆を買って塗ってください」と営業をかけたなら「いいというのは分かるけど、高くてだめだ」と言われました。私は頭にきて、それなら寄付してやると、一貫目寄付したのです。一坪の天井板を塗るのに漆一貫目、15万します。魂胆があってあげたわけではない

んですが、そのあとで現金100万持ってきて「塗ってくれ」とお願いされ、東山町とご縁が深くなりました。

実は海岸の若者が浄法寺町に来て、漆産地として頑張っていこうという思いを込めて、漆の苗を植樹しました。若者たちは、赤いポスト、スクーター、ベンツなど、年一回大きなものを共同制作しているのを聞いて、来年も続けたなら、漆を提供すると約束しました。どのぐらい使うかときいたら、一貫目も使わない、半分ぐらいだと言うのですが、一貫目寄付しました。

東京で漆器の展示会をしたら、3千円、4千年のぐいのみがばんばん売れました。うちの町でも売れ筋を作って観光客に出しています。漆の文化をなくされないと頑張っていますが、産地がなくなれば漆文化は消えてしまいます。産地として継承者を育てるために文化庁から年間714万円助成してもらい、二人の漆掻き職人を養成しています。当初、地元の青年を養成しようとしたのですが、漆掻きだけで生計を立てるのが難しいものですから、全国からも募集しました。若い人でも年取っていてもやりたい人は来てくださいということで、毎年2名ほど漆掻き職人を養成しています。これは技術者ですから誰でも出来るものじゃない。一年間びっちり訓練しないと、漆を掻きとることはできません。そういったことで、いろいろ漆産地として頑張っています。

一つは平成14年に出来上がった浄法寺町庁舎の町長室に漆を塗っています。どなたが来ても「すごい贅沢だ」と言いますが、贅沢じゃない。産地の物を地元の人に塗ってもらった。一貫目、15万円しか使いません。職人には日当だけで我慢してもらいました。その代わりに、あなたの名前が末代まで残るんだよと言いました。一日何千円でやってもらいました。そういう素晴らしい庁舎もありますから、浄法寺に来られたらぜひ寄ってください。

役場庁舎ですが、従来の設計で19億円の予算を見積もったのですが、5億円で建てました。増田知事さんに「今どき、庁舎が5億、6億で建つの」と言われました。建つのがなく建てなければならぬ。古くて地震がくれば潰れて、ケガ人、死人が出たら私の責任

ですから、建てなきゃならぬ。庁舎を建てるのに補助金が出るわけでもないし、自分ことでもお金があるわけでもないの、5億で造りますと言って、見事に出来ました。完成した時、新聞社に「感想は」と聞かれ「5億でこんなにりっぱにできるなら、3億でも我慢できた」と言ったんです。実は、いつか役に立つだろうということで、町有林3百町にスギ、アカマツ、カラマツを植えてまして、役場庁舎に使った柱はカラマツの修正材です。

45センチ角の柱です。帰りに庁舎を見ていただければいいかなと思います。

それから、念願かなって、やっとどぶろく特区の認定がされました。全国で一番どぶろくの味が分かる人は、実は林野庁の職員なんです。岩手県はどこよりもうまいけれども、その中でもあなたのところが一番うまいと言われました。それでは、ということで税務署にかけあったら、だめだと言われました。私も引っ込みがつかないので、どぶろく風味の地ビールを造るということで地元の新聞に書いてもらいました。出来上がったのは、まあまあいい味でしたが、考えてみたら材料が違うんですね。どぶろくは米ですし、ビールは麦ですから。

そうしているうちに特区の話が出て申請したら認められまして、正々堂々と民宿で造って、販売の権利も取ったのでビンで販売もしています。そういった町興しをしているということを皆さんにお知らせして、一度はぜひ足を運んでいただきたいと思います。

町づくりは地域の特性を生かすために、いろんなものにチャレンジすることが大事だと思います。うちは天台寺がありますが、住職の瀬戸内寂聴先生が昨年6月10日に引退されました。満83歳になりましたし、いつどうなるか分からないので、一応引退していただきました。ですが、命ある限りは浄法寺に来てご法要してあげたいとおっしゃるので、先般も合併記念の講演をしてもらいました。千二百人の会場が満席になり、大変盛況でした。

20世紀は産業の時代、21世紀は先ほどの三人の先生のお話じゃないですけど、心が一番大事だと思います。環境を壊さない中で子供たちの心をはぐくんでいくことが大事だと思



います。

— 第1回ということで自己紹介を兼ね、それぞれの首長さんに熱く思いを語っていただきましたら、あっという間に残り時間が15分になってしまいました。残念ながら時間指定をして申し訳ありませんが、八幡平市長さんには10分、吉村さんには最後残りの時間でお話をしていただきたいと思います。

「みのり ひかり農と輝の大地の創造」がテーマ

田村(正) 八幡平市長の田村でございます。隣の鹿角市からもお見えになってますので、そちらのお話もあると思いますので、手短にお話申し上げたいと思います。

先ほど、鼎談の中で、縄文の時代でも太平洋から日本海にかけていろんな交流があったというお話がありました。ああいう時代でさえ、交流があったのだから、新幹線だ、道路だ、車だと、こういう恵まれた時代は、もっともっと交流しなければならないと、私はそう思っております。

先ほど浄法寺の町長さんからもお話がありましたけれども、漆の浄法寺塗りは有名ですが、素材をつくって浄法寺に送り出したのは安代です。連携があってはじめて地域が生きるという意味で、安代町は今、素材生産、塗りというものを一生懸命やらせていただいています。

また、鉱山の話がありました。鹿角は花輪鉱山、小坂は小坂鉱山、大鰐はスキー場というふうにはいろんな特色を持っていますが、八幡平市では「みのり ひかり農と輝の大地の創造」をテーマに掲げ、これから新しい町づくりに取り組もうとしています。

「みのり農」は第一次産業、「ひかり輝」というのは観光とか商業。八幡平市には松尾鉱山という、とんでもない鉱山を持ってました。国策で生産に励んだのですが、昭和40年代前半に公害問題が噴出、石油を精製した時に出るイオウが、ものすごい公害だというので、石油精製の時にイオウ除去しなさいという法律ができました。

イオウ除去のために、ただ同然の安いイオ

ウが産出され、それで松尾鉱山はバンザイして閉山に追い込まれました。松尾鉱山は個人の鉱山だった。三井だ、住友だというように財閥系の炭鉱は、石油税の2パーセントぐらいが鉱山のために使うことができましたが、松尾鉱山は、個人の所有だったので除外されました。

本来であれば松尾鉱山も税金を投入して公害対策に取り組んだり、離職者を手厚く面倒みなければならなかったのが、石油産業の財閥系にみんな持っていかれた。これが現実です。その結果、松尾鉱山には、毎年5億から6億の公害対策費がつき込まれています。これを救う法律もない。ただただ毎年毎年補助金で何とかしているだけです。

私はそれをぜひ全国にアピールして、観光と学習を結びつけたいと思っています。松尾鉱山の歴史、公害の歴史、周辺には尾去沢鉱山もある、旧花輪鉱山もある。そういったものを見て回る学習と観光を結びつけた政策を思いっきりやってみたい。

平泉が世界遺産登録されたら間違いなく観光客が来ますから、来たお客さんを花巻、八幡平、鹿角に送ってもらいたい。こういう連携がこれから本当に必要になってくると思います。

地域がそれぞれの持ち味を出した上で連携を図りながら、それぞれの地域で指導していく。われわれ行政を執行する側に与えられた責務じゃないかなと思います。

— 最後になりましたが、次回のサミットは鹿角市や小坂町での開催と交流を考えております。ということで、ぜひ次回に繋げるために急遽鹿角市から吉村アイさんを特別にお招きいたしました。鹿角市で道の拡幅事業に伴って道路沿いの古い建物が壊されようとした時、関善という由緒ある酒屋さんの建物を残すため県と中心になって尽力され、人の心だけでなく家も動かし、今は立派に建物の生命を甦生されました。時間が少ないですがメッセージをいただきたいと思います。

明治の面影残す関善酒店を蘇生

吉村 ご紹介いただきました吉村アイと申します。今、県の方から助成金をいただいたということですが、実は関善という造り酒屋の移設には、県からお金はいただいておりません。建物を1千万円で買い取るために、募金活動をしましたが、700万円しか集まらず、300万円はNPOの理事たちで借金しています。

現在も運営は大変なんですけれど、テレビとか新聞に取り上げていただき、お蔭様で何とか細々と活動しています。鹿角市には国の特別史跡・大湯環状列石が、三内丸山遺跡よりいち早く発見され、整備されました。三内丸山遺跡よりはPR不足ではありますが、来ていただければ大変いいところだと思っています。

鹿角市の花輪は、旧鹿角郡花輪町です。尾去沢鉾山で栄えた町です。明治のころの教科書にも両側一キロにわたって小売店が並ぶ素晴らしい町並みと紹介される町でした。

現在は関善と向かいの小田島家の二件だけが100年の歴史を持つ明治の建物として残っています。保存運動を始め当初は一軒や二軒残しても「どうしようもねえ」と言われたけれども、一件でも二軒でも残すことが大事という考えで、何とか300メートル引っ込めて補修しました。

田村さんの未知の国縄文街道のポスターには「関善にぎわい屋敷」ということで、載せていただき、大変ありがたいと思っています。最初、市に買っていただきたいということで署名活動なんかしたもんですから、大変嫌がられました。3年かかってようやく移動してもらいました。こんなに時間かかるとは思いませんでしたが、今は残すことができ「いがったなあ」と思っています。

運営は本当に大変ですが、何とかやっています。関善を見に来てくださったお客様が、「良く残したなあ、いがったなあ」と言ってくれることが、私どもの日々のエネルギーになっています。ぜひ皆さん、今日はパンフレットをいっぱい持ってきましたので、お出でいただくようお願いいたします。縄文街道に

は、100年以上経っている建物や、200年以上経っている渡辺家が鹿角市の八幡平にあります。遺跡もありますし、ぜひお出でいただきたいと思います。

鹿角市は33年前に合併しましたが、その中に八幡平村がありました。(西根や安代が合併して)八幡平市の名称になると聞いた時、八幡平市でなく安比市にしてくださいという要求を出しました。今は、個人的には八幡平市になって「いがったなあ」と思っています。

もしかすると、八幡平市と勘違いして鹿角市の八幡平に来る人がいるかもしれないし、鹿角市の八幡平に来たつもりが、間違っ八幡平市に行くことだってあるかもしれない。鹿角市に間違ってきたら、あっちが八幡平市ですよって教えますので、ぜひ仲良くやっていきましょう。

— ありがとうございます。今回オープニングで演奏した津軽三味線はその三弦と三県をかけ、そして街道沿いの三県のそれぞれの持ち味を上手に奏でることで、未知の国の文化のメッセージを音楽で分かりやすく発信したいと企画いたしました。そして、縄文文化の北東北三県が、一色ではなく三つの音色を奏で「協奏」することで全国にその特徴を発信すべきだと考えます。

また三県連携では吉村さんたちと「三味語(しゃみご)」という言葉を作りました。今まで東北弁をしゃべることははずかしいことと言われ、年寄りたちは胸を張ってしゃべれなかったのを見直し、言葉は文化の入り口、縄文にもつながるかもしれない三県の特徴ある言葉を堂々と話し全国に発信していける環境を整えられたらと思います。縄文遺跡でのボランティアガイドや自然遺産のガイドさんたちは全国の人々に直接メッセージを伝えられる立場にあり、良いチャンスだと思います。

今回、ディスカッションにはなりませんが、第1回のサミットとして、街道沿線には熱い思いと、大きな財産が眠り連なっているということはみなさまに伝わったのではないかと思います。浄法寺町さんも町名は消えますが、文化とそれを伝える人はそのまま残るわけですから是非今後も連携して発信を



続けていただきたいと思います。

丁度時間となりました。この後、引き続き第3部で子どもたちの作ったテーマ曲の歌と

踊りのパフォーマンスがあります。是非最後まで応援をいただきたいと思います。皆さん長い時間ありがとうございました。

津軽三味線奏者プロフィール



松田 隆行氏 まつだ・たかゆき

1973年青森県生まれ、2000～2002年津軽三味線全国大会三連覇、2005年津軽五大民謡全国大会桜花グランプリ受賞など数々の大会で優勝。津軽民謡の弾き語りを得意とする。

オブザーバープロフィール



吉村 アイ氏 よしむら・あい

1948年鹿角市生まれ

NPO法人関善賑わい屋敷副理事長、秋田FF推進委員、北東北広域連携推進協議会企画委員、鹿角国際交流協会理事、自宅開放プラザ話っこホーム代表、手づくりマップ愛企画代表、鹿角市肢体不自由児者父母の会役員など幅広く活動、2005年鹿角市初の女性市議会議員となり活躍中

コーディネータープロフィール



田村 麗丘 たむら・りきゅう

1945年生まれ、東京都出身、本名・田村利久、著述業、風景計画家、日本風景文化研究所主宰、NPO法人風景の生命（いのち）を守る地域づくりネットワーク代表理事、岩手県環境アドバイザー、岩手県景観サポーター

東京の大手総合建設コンサルタントに勤務、1995年フリーとなり岩手県岩手郡西根町（現在の八幡平市）に活動拠点を移し、1997年地域づくり私塾「オッホ河畔夢塾」創設主宰、私塾を母体としたNPO法人を2001年立ち上げ現在に至る。

主な著作、1999年「風景と景観-景観甦生の論と技」(環境コミュニケーションズ社刊)、2003年「未知の国（みちのく）へ」NPO法人風景の生命を守る地域づくりネットワーク刊など

第3部 イメージキャラクターとイメージソングの披露

テーマ「^{みちのく}未知の国の「いのち」を^{うた}謳う」

縄文街道キャラクター紹介

キャラクター制作者プロフィール



小田ひで次 おだ・ひでじ

1962年岩手県八幡平市（旧西根町）生まれ、漫画家
主な作品「拡散」「クーの世界」「ミヨリの森」等、宇都宮文星短期大学芸術文化コース講師、当法人理事。東京在住。

入口展示



1



2



3



4



5





イメージソングの披露

八幡平市立松野小学校 5年生児童とお母さん方
及び
NPO法人劇団ゆう



劇団ゆうのパフォーマンス



松野小児童と父兄の合唱

新聞記事



岩手日報

転載記事
東奥日報（青森県）

掲載日：2005年11月04日、面名：地方1、記事ID：T20051104AK0003050 (C)



松野小学校課外授業風景



未知の国縄文街道イメージソング1 (テーマ曲)
「森と風のうた」(二番は岩手バージョン)

作詞：菊田悌一 (NPO法人劇団ゆう理事長)

作曲：小林 明 (NPO法人京都フィルハーモニー室内合奏団理事長
※ 番 (八幡平市立松野小学校平成十七年度五年児童総合学習で作詩)

一、みどりの風が 吹き抜けて (※一線・かあぜ)
ひかりが風に 揺れている
みなもの風が かがやいて
トンボが風が およいでる
森と風のまち
自然のまちさ
森と風のまち
僕らのまち

春のおがわに ふきのとう
夏のおたるが 飛びまわる
秋のもみじが まちを染め
冬のふぶきが 春を待つ

ぼくらのまち
やさしいまち
森と風の
未来都市 (まち) さ

二、みどりの精霊ささやいて
子どもが笑顔で遊んでる
何百年もの時を越え
生命 (いのち) が生命 (いのち) をつないでる

森と風のまち
自然のまちさ
森と風のまち
僕らのまち

春のさくらが風にまい
夏の夜空に花がさく
秋の田んぼが黄金色
冬の野うさぎ遊んでる

ぼくらのまち
やさしいまち
森と風の
未来都市 (まち) さ ※

未知の国縄文街道イメージソング2
「サイカチのうた」

作詞：田村麗丘

作曲：小林 明 (NPO法人風景を守る地域づくりネットワーク代表理事
※ NPO法人京都フィルハーモニー室内合奏団理事長)

一、A さあ 出かけよう サイカチ 村へと
春にはサイカチが 芽吹き
夏にすればば 子どもたちが
歌って 遊んで いるのよ
A さあ 出かけよう サイカチ 村へと
秋には サイカチの ささげ
冬には ならば 子りすたちも
ほこらで春まで ねむるのよ

B ああ 村の中にいれば
心が おだやかに なる
空も 風も 水も 大地も
ああ いのちが かがやく しぜんさ

二、A さあ 出かけよう サイカチ 村へと
そこには たくさんの いのち
虫も 鳥も 魚たちも
歌って 泳いで いるのよ

B ああ 村の中にいれば
心に 精霊が見える
ぼくら あの日 胸に ちかった
もう この木を 枯らしは しないぞ

C さあ 出かけよう サイカチ 村へと
そこには サイカチの めぐみ
ほんとの しあわせ そこに あるのさ
この木と ともに 生きてゆこう



平成14年



平成16年



平成15年



平成17年 サミット事前告知記事



平成15年



平成17年



平成16年



平成17年



平成17年

沿線首長 広域連携サミット開催

行きたくなる良い名

「マドと葱」その意味でも縄文街道という名を付けてもらった。名前の付け方は大事で、何となく行きたくなる良い名だ。また、縄文のみならず、その後の歴史時代の振興を見て、「東北」は長いこと互いに交流し、文化を共にして助け合っていたことが分かる。私たちは二度、そのことをかきしめてみる必要があるのではないか。

循環型社会に連携を

川口町小坂町長 町には日本を代表する精神所があり、携帯電話に似せている。自分たちでできることは自分たちで行う。近隣市町村と連携していくことが大事だ。

地域の特性生かそう

清川町形形法務町長 町では、歴々の伝統文化を地産地消の産物として活用している。平成14年に新設した協賛会が、町産品を地元で消費することで地域の特性を生かすための取り組みを推進していることが大事だ。

持ち味を出し連携を

田村町八幡町長 観光は地域を活性化に結びつける。地域がそれぞれを持ち味を出し合いながら連携していくことが自治体の真務だ。

街道沿いに歴史あり

吉野町NPO法人協会の代表理事 吉野町長 歴史は地域の宝。縄文街道は、街道沿いの歴史を伝える役割がある。八幡町が誕生して、中

「未知の国縄文街道首長サミット」

「ひわて経済同友会」

縄文街道
Iwate-Akita-Aomori

平成18年

「未知の国縄文街道首長サミット」

「北鹿新聞(特集記事)」

縄文街道
Iwate-Akita-Aomori

「未知の国縄文街道首長サミット」

「北鹿新聞」 「朝日新聞」 「読売新聞」 「毎日新聞」

縄文街道
Iwate-Akita-Aomori

平成17年

未知の国 縄文街道
Iwate-Akita-Aomori

よみがえれ！北東北の環境遺産

「北鹿新聞」(特集記事)

未知の国 縄文街道
Iwate-Akita-Aomori

よみがえれ！北東北の環境遺産

「朝日新聞」 「読売新聞」 「毎日新聞」



「未知の国」及び「縄文街道」とは

「縄文の大地」である青森・秋田・岩手。ここには一万年に及ぶ太古の生命の記憶が宿り、数多くの縄文遺跡と不思議、そして豊かな縄文のこころと恵が残されています。当法人では北上川最上流の地から津軽まで、北東北の中央を縦断する唯一の道である津軽街道(国道282号)と国道7号で結ぶ八幡平市から青森市までのルートを“縄文の心と恵を結ぶ歴史道”「未知の国(みちのく)縄文街道(略称『縄文街道』)」と提唱し命名しました。

この街道起終点にはアイヌ語で「神々住む」意とされるイワの付く霊峰、岩手山と岩木山が聳え、沿線には縄文遺跡の最も謎の遺構である環状列石が数多く集積し、陰陽の関係にもあると考えられ日本のピラミッドと呼ばれる山々がさらに軸上にこの地域を貫きます。また、縄文時代に今の地形となった十和田湖や八幡平、縄文時代に成立した手付かずの白神のブナの森、そして縄文の血を濃く残す秋田、津軽、南部は美人の産地とされ、アイヌ語や津軽弁などの特徴ある言語、UFO目撃のメッカとされる鹿角、新郷のキリストの墓、霊場恐山も加わって、ミステリー、ロマン、ファンタジー、メルヘン、ノスタルジーといった好奇心をくすぐる伝説や民話の似合う日本に残された一大「UNKNOWN WORLD」となっています。

このように神秘に満ち、歴史的に渡来文化圏から最も意識距離の遠い「奥」と名付けられたこの「陸奥(みちのく)」の大地を、新たに「未知の国(みちのく)」とくくりました。

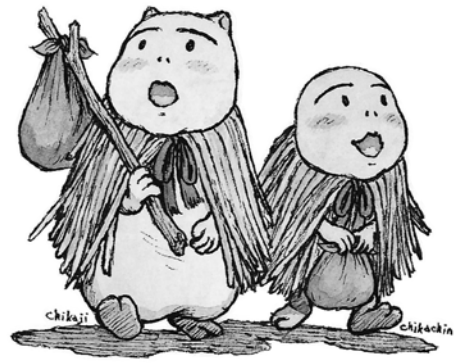
「縄文街道甦生プロジェクト(縄文の心と恵を結ぶ)」関連活動の経過

- 平成11年 「縄文街道構想」を会長の田村麗丘が著作「風景と景観」と共に提案(岩手日報記事に)。
- 平成13年 当法人発足。「縄文回廊ターミナルコンサート」開催(縄文街道構想、法人のHPに掲載)。
「サイカチ物語」序章発刊(作画理事小田ひで次)風景の生命の化身サイカチの精霊誕生。
- 平成14年 朝日新聞主催「みちとくらしのネットワーク」シンポジウム招待参加。北東北縦軸連携「縄文街道甦生プロジェクト」が北東北広域連携推進協議会(以下協議会)の北東北広域連携活動促進助成事業(以下助成事業)として採択され、調査開始。広域連携活動参加。
- 平成15年 調査報告書「未知の国(みちのく)へ」発刊。北東北縦軸連携「縄文街道甦生プロジェクトⅡ」が協議会の助成事業として採択。「第1回未知の国縄文街道広域交流フォーラム」開催(西根町)「未知の国縄文街道キャンペーンキャラバン in 岩手」開催(西根町)。
- 平成16年 「縄文街道」プロジェクトが北東北3県のTV広報番組で北東北広域連携推進事業として紹介される(秋田放送取材)。「未知の国縄文街道キャンペーンキャラバン in 秋田」開催(鹿角市、大湯ストーンサークル館)。未知の国縄文街道倶楽部発足に向け街道沿いのNPOや地方自治体と交流。北東北縦軸連携「縄文街道甦生プロジェクトⅢ」が協議会の助成事業として採択。「未知の国縄文街道キャンペーンキャラバン in 青森」開催(青森市、三内丸山遺跡縄文時遊館)。「未知の国縄文街道倶楽部」事務局を八幡平ロイヤルホテル内に設置決定。東京、秋田に出先事務所決定。
- 平成17年 「新たなまちへの“煌き”づくりセミナー」開催(西根町)、八幡平市誕生に向け環境教育、地域振興、広域観光連携を提案。
未知の国縄文街道イラストマップ原版完成(縄文街道甦生プロジェクトⅢの成果品。ポスター・チラシの地図として使用)

メ モ

A series of 20 horizontal dashed lines for handwriting practice, arranged in groups of five down the page.





未知の国
縄文街道[®]
Iwate·Akita·Aomori





みちのく
第1回 未知の国縄文街道首長サミット報告書

いのち
NPO法人風景の生命を守る地域づくりネットワーク事務局

〒028-7111 岩手県八幡平市大更16-12-5

TEL.090-5592-3872

FAX.0195-75-2413

E-Mail yumeohho@mbf.ocn.ne.jp

<http://www21.ocn.ne.jp/~fitn/>

